

風景：散文詩

著者	川崎，薩男
雑誌名	龍南
巻	2 4 2
ページ	6 2 - 6 3
発行年	1938-12-10
URL	http://hdl.handle.net/2298/7507

— 散文詩 —

風景

川崎薩男

いつでもよいから自分でも思ひがけない所でふと後をふり返つてごらんさい、たとへば
さよならと友と別れて部屋に歸るのが何かものうい時、四歩五歩と歩み去つたとしてもその
まゝひよつと後を見るのです、それはもうあなたの想像通り、何の變つた事もなく電車は灯
を消して車掌がボールを電線にはめ込んでゐたり、戸口から最後の乗客が降り立つてあたり
を見廻し、さつと通りすぎるこゝちよげな乗用車の向ふに、長い劍を上げた兵士が立派な姿
勢でぐつと何かを見つめてゐたり、どこかよその美しい少女が、樂しげに母と語り乍ら街へ
行くバスを待つてゐたりするでせう、けれど、青白いスパクーがこきざみに急いで歸る若い
女事務員の後ろ姿を照らし、荷車がほこりを匂はせてふた親につれられた盛装の子供の側ら
を通りすぎ、巧みに走りぬけてゆく魚屋の若者の自轉車が匍を下げた洋服の男を危ふく避け
て、車道も歩道も街路樹もない暮色の大道にまぎれ込むと、雖然とした巷の騒音が不意に耳
元に迫つて來て思はず息を深く吸ひ込んで終ふでせう、その時ひよつと心に寂しい影がさし

たならば今別れた友をさがすのです、もう友は行き交ふ人々の向ふに大股に歩み去り、やがて夜の弱い光線では見分け難くなり小路を曲つて姿を消すでせう、あいつは歸つてゆく、そう思つて向き直り新たに家に向つて歩み初め今日の事明日の事と、とりとめなく考へたり、やらうとするといくらでもある勉強にきほひ立ち、さあやるのだと調べものや讀みかけの本また出さねばならぬ手紙の事など考へて角を曲り曲り、屏のすき間に尻を見せて逃げ込む猫のふり返つた目つきを見たり、はつと足先に落ちてきた大きな枯葉の音に驚いたりして下宿に歸るのもよいでせう、そうです、月の光で水のような空には強い星だけが冷くピカピカとまたゝき始めます、が、言ひ難い虚しさが心を領して乏しい青春の幸を歎く想ひがあふれるならば、また、目ごろの心内の悶争がつのり秘かに耐へるに切ない程にもなれば別れた友がまたなくなつかしく思はれ、自分の惑ひ想ふ問ひを彼は如何に解きつゝあるかと謙虚な心から恥を忘れて判斷の主權をひととき友に渡し、また動かうとする情熱を空しく抑へて、じつと向ひあつてみようかと、或は、耐え難い立場を訴へて友の批判に頼り如何にもして自分を守らうかと、常には疑ひ深い細かな智慧が突然行動の中に消えようとします、すると、おや僕はどうかしてゐるとわれに返つて、行く友を追ひかけるなんてをかしな事さと日常の意識が感傷を抑へ妙な笑ひが頬に漂ひ、黒いマントを風に吹かせて街に出てゆく學生の群を見て世間の思慮が冷たく吹き始めた秋風からあなたの心を守つて呉れるかも知れません、しかし一方素直な心から、なんだまた來たのかと云ふ工合にあいつを驚かしてやれと、追ひかける氣になつたら追ひかけるがよいのです、友はけだんな氣持で失笑するでせうか、しかしまた友は別れ際にふり返つてあなたの後ろ姿を見たかも知れないのです。